

〔基調報告〕

## 歴史地理学における「変革期」

千葉 徳 爾

- I. 変革期をどうとらえるか
- II. 変革期のとらえかた
- III. 具体的事例としての江戸—東京地域の発達過程
- IV. 杉並地区の通称地名にみる景観の変革期
- V. 通称地名による地表景観変革期の形成理由の分析
- VI. 歴史地理学における「変革期」

### I. 変革期をどうとらえるか

地表がこれまでに経過してきた状況の中には、その状態が急変した時期と、長期にわたって安定した状態が継続した時期とが存在するはずである。変革期とはそのうちの前者をさすものであろう。その状態は、単に理論的に考えられるだけではなく、事実としてそうであったことは、大にすれば氷期と間氷期との存在、小にすれば個々人の日々の生活環境を考えても明らかな事実であろう。したがって、現在までの地表状態の変貌と人間生活とのありかたに大きな関心をもつ歴史地理学が、その急変期をいかに考察するかは、重要な研究課題である。

ところで、なぜ、長い安定期よりも急激な変動期、本大会の課題である「変革期」の方が研究者の関心を惹くのか。これは極めて初歩的な問いであるが、同時に一言では答えにくい。簡単にいえば、安定して変化のない時期はどこをとっても同じ状態で研究上意義が乏しいからと言えが、果たしてそう単純にいいよいか。地誌が必要なのは、いわゆる「所変われば品変わる」という事実から出発して、なぜにそうなるのかという疑問を説明するからだ、学生時

代に教授から説明を承ったことがある。それならば、長期安定期についてもなぜ安定して変化しないのかを疑問にするということは、重要ではないのだろうか。世間に波風の立たないことは、人々にとって願わしいことなのだから。

しかしながら、事実としてわれわれの世界ではダイナミズムが生理的に必要であり、個人的にも学問的にも、そちらに関心が集まるのは当然といえる。そして、変化は地域的にも時間的にもさまざまなスケールで生起する。浮田がスケールの重要性を指摘して考慮を求めるのはそれであり、さらにどのようなメカニズムがそれぞれ間に働いているのかも、大いに興味があり、また重要な課題であるが、いまはそれらをおく。

今回の課題となるのは、どのような形をとるにせよ、歴史地理学が扱う時期として変革期が存在することを前提に、どのような特性が現れる時期を「変革期」とみるかが第1の問題点、そのような「変革期」に対処する研究の方法、技術はどのようなものであるかが第2の問題点であろうと考える。

この2つの視点のうち、本報告者のとるべきものはいずれか。ひそかに思うに、都市、交通、農業など特定の具体的な地表状態を取り扱う分野では、その必要上、第2の問題が重要であるにちがいない。したがって、それらの分野についての発表者は、おのずからそれら具体的事例の研究法をも取り扱わざるを得ない。また、私事にわたって恐縮であるが、本報告者は本学会会員の末席をけがしながら、その守備範囲として前記のような専門の分野をもたず、いわば漫然と歴史地理学の研究法を自己の研究課題に適

用するに止まってきた。その点で前記の第2の課題を論ずるほどの蓄積を持たないことを恥じなくてはならない。しかも指名発表の責を果たさなくてはならないとすれば、残るところは、第1の問題である変革期の指標とはどのようなものかについての所信？（というものがあるならば）を述べて責をふさがなくてはならないであろう。

## II. 変革期のとらえかた

以上は前置きである。ところで隣接の学問である歴史学では、この時間についての造詣は、歴史地理学にくらべればはるかに深く思いを潜めているはずであるから、まずその分野ではこの変動の時代と安定の時代とを、いかに区別しているかを学んでみよう。

そうは言っても、世の中の変化とはこれこれがこのようになるから、したがって変革期なのだといった公式のようなものがあって、いつの時代にも適用できるというわけではなさそうである。それに、歴史学に素人である発表者からみると、何と云っても歴史学はその生立ちや史料の性質からみて、政治にかかわる分野を中核として問題を取り扱う視角から離れるのがむずかしい。つまり支配—被支配の世界で現象を解釈しようとする。もちろん、そういう力がこの世の中をかくあらしめる大きな因子ではあるが、その力とは単なる物理的な力であるよりも、そうした物理的な力に転化するような、支配者もしくは被支配者の心の中に醸し出される思念といった方がよい。そうした人心の表現を史料の中によみとるときが、変革期のはじまりとみるのが、歴史学というものではなからうか。

もちろん、その心理が力に転化する契機としては、災害、自由の抑圧、社会的欲望、そのほか長期・短期にわたる種々の事象があり、複雑なメカニズムが諸要因のかかわりの中に認められるであろう。しかし、いずれにしても、変革が生起する底には人間そのものがあり、いわゆる自然条件ではないというのが歴史学の見地とみられる。

さて、以上の私見からみて知られるのは、人間研究の学では、もの、ことの陰には必ずや個人であれ集団であれ、「人間の意図」が秘められているという構図が、これを観察する人々の共通の認識となっているということがある。同じく歴史的事象をもって地表状態の変動についての重要因子とみる歴史地理学であるならば、その重みの上で歴史学とは若干の判断のちがいはあろうとも、個人的であろうと集団的であろうと、やはり人間の心的要因を変革の重要契機とみなくてはなるまい。

ただし、念のためにことわっておくならば、「歴史地理学といえども、地理学の分野に属する以上は、自然的な要素にも大きな価値あるいは意義のある場合があることを認めなくてはなるまい。安易に人的要素を重視する歴史学の方法に傾くべきではない」とする見解が、私見に対して現われることが予想される。そのこと自体は贅意を表すにやぶさかでない。と答えるよりも、私自身は、人間というものを、いわゆる自然と対立させて考えているのではなく、人間はいかに複雑な思考、感情を有していても、所詮は霊長類ヒト科に属する生物であり、その意味で自然の働きを有し、自然の作用に従って思考、行動するものであると考えている、といった方が適切かと思う。

単に人の心は複雑であり偶然的であるから、他の自然因子の動きとは別個のものとするべきで、法則的動向に律せられる自然因子と対立させようという19世紀思考に従うべきではない。人の心の動きもまた自然に発揮顕現する現象の一つであって、それを特別視すべきではないが、ただ、現在の我々には、それを特殊とし、例外的存在と久しく考えてきた罰として、その動きを体系的に把握し、それによるヒトの行動を判断することができないのである。つまり、われわれの研究は、その対象の2分の1を占める部分について、やっと緒につくかどうかという初歩の段階に止まっているといえよう。

### Ⅲ. 具体的事例としての

#### 江戸—東京地域の発達過程

そうであるときまれば、あわててむずかしい理論を構築して、後で間違いに気づくよりも、まず、じっくりと事実を観察し吟味してることからはじめた方がよい。そのような面からの検討事例として、ここで取り上げようとするのは、現在東京市街地の拡大に伴って急速に変貌しつつある武蔵野台地の、地形・気候から住民の生活・文化にわたる状況である。

言うまでもなく、変化しつつあるとはいえ、その変動は細部ごとに異なり、概観的にいえば都心に時間的に近いほど変動が大きく、そこから時間的に遠い土地ほど変動は少ない。しかしながら、15世紀後半、太田道灌が勢威を振った時代に、大半が二次植生に覆われて集落が点在するに過ぎなかったと推測されるこの台地に、江戸城が築かれ、城下のわずかな町であったといわれても、本格的な城郭や市街の建設とそれに伴う耕地その他の拡大とは、それからまた半世紀以上経ってからのことであった。

しかしながら、もし世上传えられるように、豊臣秀吉が小田原落城後に、徳川家康に関東を所領として与えたとき、これからの政権の中心地は江戸であると説いたのが事実であるとするならば、歴史学的にはかような支配者の動向が明らかに認められたこの年（1590年）をもって、武蔵野台地の変革期の開始とせねばなるまい。つまり、政治、ことに支配権力の心の動きがその指標となる。そして、一応の江戸市街の整備が完成する（青梅街道・五日市街道による建築資材、ことに石灰、燃料としての薪炭の供給、玉川上水による飲料水の導水など）17世紀半ばを、その変革の終わりとみれば、この長さは約4分の1世紀にわたる。

その後の急激な変革としては、いわゆる武蔵野新田の開墾があるが、その規模は面積的にさほど大きくはない。さらに全域にわたる作用を及ぼしたものに明治維新に伴う武家屋敷の消滅から、産業革命に伴う工場、鉄道、道路の建設、

さらに関東大震災後の市街再建までの約50年にわたる時期を変革期とみることができる。これも幕藩制の崩壊と明治政府の遷都という政治権力の交替、西欧化政策という権力側の動きがその開始期の指標となる。

しかしながら、それらは視覚や聴覚のような単純知覚による対象把握に頼るものではない。極めて複雑な総合判断にまたねば理解しえない、いわゆる天才的直覚能力をもつ人のみがこれをよくすることができる。

ひるがえって、わが歴史地理学がこれまで主として研究してきた、形ある存在としての地表とは、主として前記の単純知覚に対応して理解されてきた。いわゆる「景観」と呼ばれるものがこれに相当すると思われるが、それらが、この歴史学において変革の指標とされる事象との間に、時間をおかず瞬間的に対応して現象化される可能性は、まずあり得ないであろう。たとえば明治新政府が江戸を東京と改称し、政治上の核心とすることとなったのは政権樹立の年内ではあったが、それでも10カ月を要した。しかも、それによって江戸の市街にはいささかも景観上の相違はみられなかった。上野台地上のみの観察としては、若干の建築上の変化がみられたかもしれないが、それは政権交代の直接の作用ではなく、彰義隊の戦闘に伴ったもので、いわば災害の結果であった。

つまりは歴史地理学の対象となるもの、地表の「景観」を構成するものの「変革」の指標となるのは、この点で歴史学の変革期の指標とは異なるのであり、それらは政治的指標より時間的にはるかにおくれて実現されるのが一般的ではなからうか。まず、この点を注意しておこう。

そうであるとすれば、歴史学にみるような非知覚性指標は、歴史地理学における「変革期」を求めるための重要な参考資料ではあるが、それによって「変革期」を位置づけるのは適切とはいえない。いいかえれば、歴史年表がそのまま歴史地理学における時期区分を定めるものにはならないということである。

そこで、広く漠然たる武蔵野台地などを論じ

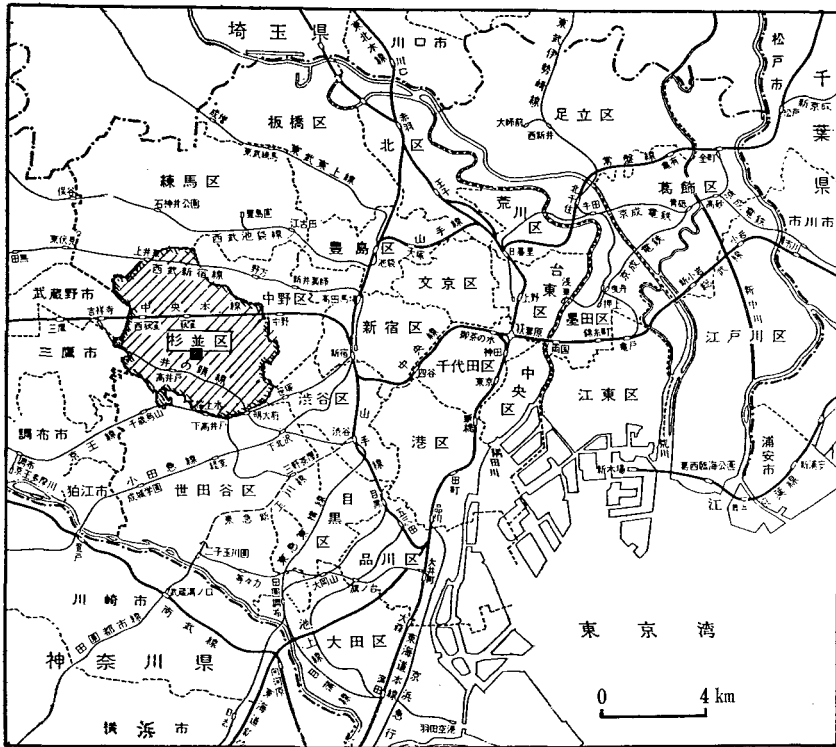


図1 杉並区位置図 (■印は図2, 3, 4の部分)

ていては、具体的な、あるいは知覚に対応する「景観」を求めることが困難であるとみて、より狭い範囲を考察することとしよう。東京地域の中でも最も甚しく変貌したのは、その西部に当たる武蔵野台地と、それを刻む小河川の谷とが交錯する地域である。その一部であり、中央本線の鉄道に沿う杉並区は発表者に調査ならびに資料収集の便があったので、この地区を例として述べてみたい。

まず、景観変動の著しくない1924年と、その激変中の1933年、ならびにほぼ変化が安定した1989年の、同一地区の地図を並べることによって変動の状況を示す。道路・河川および主要建築物の配置状況のみではあるが、いかに急速に「景観」が変わりつつあるかの一端はうかがわれよう。ことに、自由に曲流していた河川が直線化され、新しい道路が開かれ、また河川沿岸の水田畦畔が失われ、灌漑水路が消えていることが注意される。

しかしながら、ここでいまだ少し立ち入って考えてみよう。一体何が変わるのかが「変革」なのか。歴史学の場合には支配一被支配のありかた、したがって社会の体制が変われば変革となりうることはさきにみた通りである。それでは、歴史地理学では「景観」を構成するもの、たとえば市街地で特に目をひく建築物が1つ新設もしくは消滅すれば、それも「変革」なのであろうか。

たとえば東京タワーが出来たということは、東京の「変革」なのであろうか。もっと極端な場合を想定するならば、街路と家並とは以前の形態のまま、その色彩も材料も細部の造作ももとのままではあるが、古いものを取り壊してすべて新しく改築された場合、つまり、古い資材が新しいものに変えられ、しかも形態が同一であるという場合には「変革」なのか、それともそうではないのか。また、これも視覚では地図などに表現されないけれども、その住民だ



図2 1924年現在の杉並区成田地区

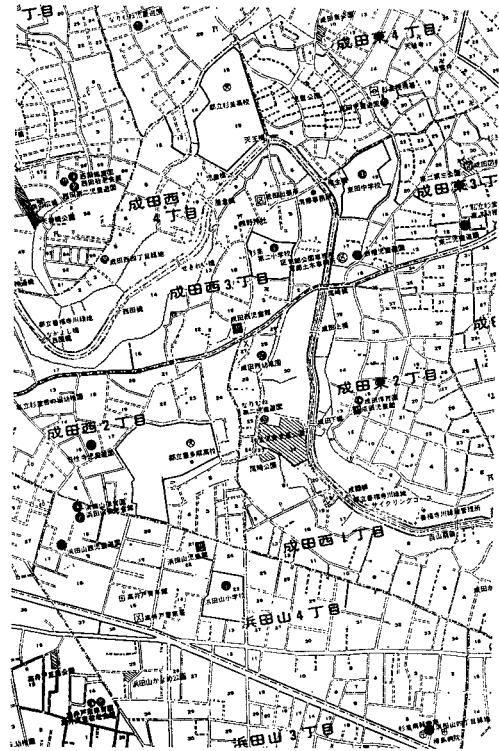


図4 1989年現在の杉並区成田地区

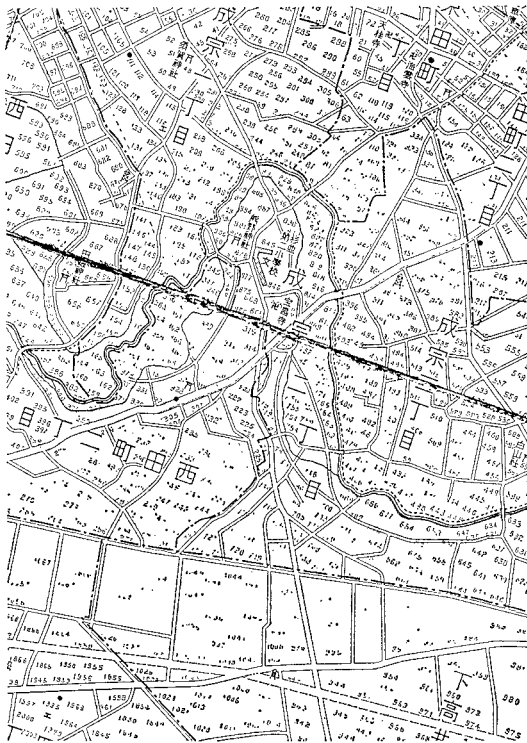


図3 1933年現在の杉並区成田地区

けが古い居住者と入れかわってしまったという市街は、景観は変わらないが都市組織としては「変革」したということになるのか。歴史地理学としてはどのように考えたらよいのか。

実は、このような点に、単なる知覚上の形態論の問題点が潜んでいる。歴史地理学が自然地理学に所属するものでないとするれば、その形態も単に視覚や聴覚のような単純知覚、機械的測定によって代替されるものによって判断できる事物に、その指標を限るべきではなかろう。そのような視点からすれば、歴史地理学においても歴史学と同じように、人間の要素を単にその現象のみに止まらず、その現象を物理的、あるいは形態化するような力に転化させる人的因子、つまり人心にかかわる因子を「景観」変革の起動要因として重視しなくてはなるまい。

#### IV. 杉並地区の通称地名にみる景観の変革期

歴史地理学が主として依存する史料が、人間の形成する「景観」であり、それを決定する人

文的因子、ことに人間の思念の如何にかかることは、これまでの論議の過程からほぼ理解されたと考える。しかしながら、その心的メカニズムは、「人間」というわれわれに未知のブラックボックスの中であって、地理学徒にはその内容をうかがい得ない。わからぬものはそのままにおいて今後の探究にまち、ここでは再び前に帰って杉並区域の過去の景観が、どのようにして現在に至ったか、それを瞬間的とまではいかずとも、相対的に速やかに反応表現する資料によって考えてみることにしよう。

これまでの歴史地理学的研究の多くには、その明らかになし得たものは、ある一定の時期によって切断された地表面の復元であり、そのような時期的断面を順次配列したものは、ちょうど映画フィルムの各コマを速く回転させたのと同じく、擬似連続性を示すにすぎないという批判があった。これは、歴史というものは連続性をもつのに、歴史地理学はそれを擬似的にしか表現し得ないという、方法論上の批判である。

事実として、前項に示したような地図による場合に、厳密にはそれが示すものは地図作製時の一断面を示すに止まることから来る。したがって、歴史地理学の見地からするときには、前提としてそれが示す測量・製図時のある程度前から、製図の瞬間に示される状態にかなり近似した景観をもち、また、その地図の示された瞬間からある程度後の時期まで、その近似の状態を維持しているであろうと予測した上で、この地図を資料として利用するのである。したがって、地図化され得る時の断面をなるべく多く作れば、近似性が連続性をかなり代替できるとみなしている。

したがって、一般的に歴史地理学では、この前提した仮定と近似とが成り立つものとして議論を進めるが、事実として、地図化できる資料というものは決して多くは得られず、1、2の地図のみで考えなくてはならない場合が大半を占める。これがわが学の弱点であろう。

これに対して、人間の心的因子の働きは、そのメカニズムこそブラックボックスの中に納ま

っているものの、そこに投入される作用は、出てきた力とは連続していることが明らかである。しかも人間は10歳前後で周囲の景観についての認識が、程度の差こそあれほぼ確実に形成され、その後の全生涯を通じて記憶は連続性をもつ。現代では記憶の形成から以後の平均余命は60年前後であろうから、さきに記した東京の「変革期」はこのような都市生活者の一代の記憶範囲＝集合によって完全に覆うことが可能であろう。つまり、これは連続性ある資料を提供する可能性をもつ。

いま対象とする杉並区では、区教育委員会が昭和61年度に郷土史家らを動員して、住民が古くから用いてきた通称地名を古老たちから聞きとり、これをカード化するとともに、その位置を地図上に確認した。この通称は近隣社会内で通用し、公称とは異なって使用者数と通用範囲は限定されるが、住民の呼称当時の地表景観の共通の認識を反映するものとして、極めて適切な指標といえる。その通称の発生理由、使用期間、消滅事情などを明らかにすることにより、景観の形成、持続、消滅の過程は連続性をもって求められるから、その間の変革時期と変革理由とを知る端緒となろう。

報告者はこのカードの整理を依託され、かつその利用を許されたので、それらを利用して、住民が認識した地表景観の発生—変貌—消滅の、明治—大正—昭和にわたる約70年間の武蔵野台地東縁に近い地域、かつ東京に接する地域での、「変革期」はいつ、どのような形で起ったかを求めてみた。

通称地名の数は約400あり、区内では一平方キロ当たり約11個となる（ここでは区内を東京西郊の一サンプルとして、全域を一区として扱い、その内部分布は同一と仮定する）。いうまでもなく、通称地名といっても内容的には一地点を指すもの、ある広がりや延長を指すもの、同一地に別称があるもの、また、発生理由・消滅時期など伝承者によって若干の差異あるものなどがある。これらについては適宜取捨を行ったが、それでも約380が残った。

表1 通称地名の景観分類とその消滅時期

	大正年間消滅	昭和20年	昭和20年代	昭和30年代	現在使用中	計	消滅率	大正	昭和20年前	昭和20年代	昭和30年代	現在使用中
		まで消滅	に消滅	に消滅					後消滅			
山林	5	26	15	2	5	53	90.7	9.3	48.1	27.7	3.7	9.3
谷	1	4	1		1	7						
くぼ	1	1	2		1	5						
がけ・はけ	3	2	3			8						
川・池・計・泉	2	10	3	1	2	18	88.9		55.5	16.6		11.1
田	2	11	6		2	21	90.5		52.4	28.6		9.5
畑		5	1	1	1	8	87.5		62.5			12.5
原木	3	7	6		1	17	94.1		41.2	35.3		5.9
屋敷	2	6	1		1	10	90.0		60.0			10.0
堰	1	7	2			10			70.0			
橋	1	5	1	3	6	16	62.5		31.2			18.7
道	7	16	11	8	5	47	89.4	14.9	34.0	23.4	17.0	10.6
坂	3	12	8		10	33	69.7		36.4	24.2		30.3
神社		3	4	1	4	12	66.7					33.3
仏堂		3	1		1	5	80.0					20.0
塚・像	2	6	3		1	12	92.0		60.0			8.0
場所	6	26	5		7	42	85.7	12.2	53.0	10.2		14.3
その他	3	22	8	1	10	44	77.3		50.0	16.3		22.7
集落名		3	4		7	14	50.0		21.4	28.6		50.0
計	42	177	86	18	55	378						
比率	11.1	46.8	22.9	4.6	14.6	100.0						

このうち、ほとんどすべてがその発生は明治以前にさかのぼり、中央本線、水道敷設、中野電信隊設置などに伴って、大正期にできた地名もあるが、その数は全数の5%程度にすぎない。それにしても、かなり多数の通称地名が公称地名や番地とは別個に、住民生活の便宜上必要であったことがわかる。なぜならば、現地に居住する者以外には、通称地名を用いる必要があり、また知っている必要を感じる者はいないはずだから。

表1は杉並区域で通称地名として使用されてきた地表景観そのもの（すなわち、名称として□田とあれば田として分類するという方法ではなく、その土地が田であれば田という名の有無にかかわらず田に分類する）によって分類し、また、その通称がほぼ消滅して呼ばれなくなった時期（人によって時期が異なる場合は頻度の

多いものによる）を概数として示した。どのような景観呼称がいつごろ失われたかによって、その地表状態の変革期の時期を推定しようと試みたものである。

表1の左半部は実数を示し、右半部にはその景観呼称の全数に対して消滅時期の比率を概算して示した。いうまでもなく、全数が少ければ、わずかの減少が大きな比率で現れるから、全地名数がほぼ類似した数値を示すもののみで比較しなくてはならない。したがって、他と比較するのが適当でない景観項目については、空欄とした。

この表を通覧して、まず注目すべき特徴は、関東大震災火災あるいは第二次世界大戦による市街地の潰滅後といった、予想される変革期よりも、昭和初年から第二次大戦までに消滅した通称地名に反映する地表景観の変貌が、最も大き

い数値を示すということである。いかえると、東京隣接地である杉並地区の武蔵野台地の地表景観は、歴史地理学的には平穏な社会状況の中で「変革期」を経たということになる。

調査した通称地名の約半数に当たるものが、この期間、ことに昭和1けたの時期に消えている。第二次大戦の終わった1945—55年の時期はこれに次ぐ変革期であるが、ここで消えたのは、戦時中の軍関係にかかわる施設、行動などにかかわった通称が少なくない。この時期は東京都市域をとっても、日本全域をとってみてもすべてについて「変革期」と呼んで差し支えなかったと思われるので、この程度の通称地名による地表景観の変動は、あるであろうことが予想できるが、その2倍に当たる地表景観を反映した通称が、予期しない時期に失われたことは、どのように理解できるのであろうか。

#### V. 通称地名による地表景観変革期の形成理由の分析

以上の問題を解決するために、個々の地表景観について考えてみる。そのために、消滅比率が著しく大きい景観と、逆に現在も通称がそのまま残されている比率の大きい景観とは、それぞれ何であるかを調べて、それぞれの性質を対比してみるのが適切な方法である。

前者として、その90%前後が消滅してしまった景観には、絶対数の大きいものとして山林、道路、地点（場所）がある。まず山林は〇〇山、△△林などと呼ばれたものが多く、それらは平地林、斜面林など林木の叢生によって特徴づけられていた。その消滅は耕地・宅地・道路などに転化したことによるが、同時にそれを可能にした燃料・照明の、薪炭から石炭・ガス・電気への転換があった。

中程度の数値を示す通称として消滅の顕著なものに、川・池・泉などと水田、および原がある。前者は山林が乏しくなってその涵養源が絶たれたことによるであろうが、水田の減少は、堰の通称がこの時期のみに70%を失っていることで、稲作そのものが放棄されたことをうかが

わせる。その大きな理由は、農家が稲作を止め、畑作、もしくは宅地化による借家、アパート等の経営者への転換、商店、工場経営などに変わった結果とみてよい。

つぎに、これらと対照的な人文景観としての道路および地点の消滅は、実はそれらが失われたものではなく、形態を改めたことによる。

武蔵野の面影を残す明治・大正時代の道路には2つの種類があった。一つは江戸と西方の山麓の都市とを結ぶもので、青梅街道・五日市街道・人見街道のようにほぼ直線的に走る、いわば遠距離旅行者と貨物のための通行に役立つものである。もう一つ、杉並区内ではこれらのほか、妙法寺道、長命寺道といった著名寺社への参詣者の通る道があり、季節的に多くの特定の行装をした参拝客が群をなして歩き、そのために呼称が生じた場合が稀でなかった。

ところが、大正年間から乗合バスが発達し、それまで徒歩者の多かったこれら道路は、その形も位置も変わらず、通行者の目的・経路も同様であるにもかかわらず、昭和初年に交通機関が乗合バスあるいは遊覧バスに変わった結果として、それらの道路名は消失してしまった。また地点名も、同じく徒歩者を対象とした商店、飲食店、旅館などにかかわるものが多かったが、それらが客の変化に伴って転廃業あるいは移転した結果、場所あるいは地点名としては消失した。

いうまでもなく、東京から郊外へ住民・学校・寺院（墓地）などが移転するものが増加する

表2 杉並区土地区画整理組合の設立と事業完了年

組 合 名 称	設 立	事業終了
高円寺耕地整理組合	大正12年	昭和15年
井荻土地整理組合	大正14年	昭和10年
上荻土地整理組合	昭和3年	?
和田堀第1土地整理組合	昭和5年	?
天沼土地区画整理組合	昭和6年	?
永福寺土地区画整理組合	昭和9年	昭和55年
和田堀第2土地整理組合	昭和16年	(第二次世界大戦後実施)
馬橋土地整理組合		内容不明



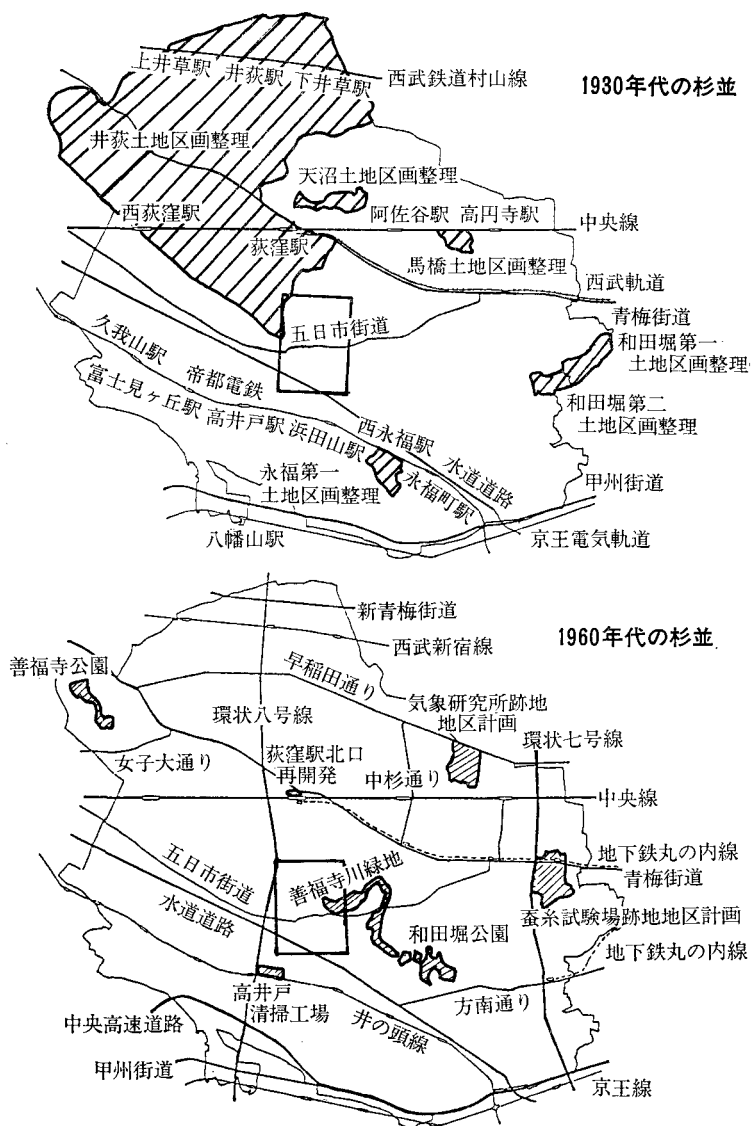


図5 1930年代の杉並の区画整理と1960年代の都市計画（矩形は図2，3，4の位置）  
 東部は現在も未整備地域として多くの問題を残している

につれ、この地区でも土地区画の整理と土木工事が行われ、道や場所が変貌したものも少なくはない。しかしながら、それがすべてではないし、旧通称に代わって新しく駅前商店街などになり、別の通称が生まれたものも（この表には含まれない）稀ではなかった。したがって、景観として地図化されないものも、また変革の指標となることが知られる。

また、土地区画の整理は第二次世界大戦前、昭和10年ころまでに事業を完了しなかった場合は資材・労力その他が不足するようになり、ほぼ10年～15年にわたって作業が中断されたのが事実であり、この期間の景観の変革には直接かわることが少なかったという。ただ、昭和30年代になっても、この道路の通称がなお変化しつつあるのは、大規模な改修や路線変更が高度

表3 1931年杉並区一部の住民人口（本籍・寄留別）

1931年12月末現在	高円寺地区	馬橋地区	阿佐谷地区	天沼地区	田端地区	成宗地区	全 数
本 籍 人 口	1,244	513	894	425	259	246	3,581
同 上 比 率	19.3%	19.2%	23.4%	21.9%	32.2%	36.4%	21.9%
寄 留 人 口	5,205	2,160	2,924	1,520	546	428	12,783
同 上 比 率	80.7%	80.8%	76.6%	78.1%	67.4%	63.6%	78.1%

(杉並区史資料による)

成長に伴って行われるようになったからで、平穏な時代、経済活動の発達が、少なくとも交通景観の変革については大きな作用をもたらすことが明らかであろう。

以上は、地表景観の変化を反映してそれまでの通称地名が消失したものであるが、逆にあまり顕著な地名消失をみない通称には、どのような性質があるであろうか。まず、消失率50%の集落についての通称名がある。大きな集落または本村からやや離れた家屋集団の通称であるが、これは居住地区であり改変の場合が少ないことや隣保組織の存在から、従来の呼称がそのまま維持される場合が少なくない。

さらに消失60%台の呼称に橋の名称、坂の名称、神社の名称がかぞえられる。橋と坂とは地形的・位置的にみて変化が少ない。地形的に台地と低地との境界が全く消滅することは稀であり、渡河地点は道路や地形と関係して大きく変更されず、たとえ多少の位置がずれても地点を示す通称としては旧橋名が使用されることが多い。さらに神社位置も軽々しく移動することは地域社会の賛同が得がたい（聖地として新しい場所を選定することが困難であり、反面に神社の奉仕や由来との結びつきが強い）ことがその理由である。

通称地名はさきにも記したように公称地名とは異なって、公共機関に登録され、したがって容易に改変を許さないという性質がない。人であれば戸籍上の氏名ではなくて、あだなに相当する。人のあだながその人の外観や性格で定まるように、通称地名はその地表景観や用途などに注目した呼称である。したがって、その土地

景観や目的・意義が失われれば、通称も行われなくなり、それが消滅した以後は住民にとって無意味であろう。

このことは、地元の通称を創造し使用して来た住民の子孫にとって事実であるが、同時に景観変更後に新しく来て住民となった人々にとっても、事は全く同様である。大正12（1923）年の関東大震災火災以後、市街から移転居住しはじめた新来住民は、昭和5（1930）年以前に全住民の70～80%に達していた。したがって、土地景観に基礎をおく通称地名の消滅傾向は、この時点より早く始まったのである。

当時の杉並区域の中部（中央本線沿線）および南部のみについて、住民の本籍・寄留別人口が、昭和5年の国勢調査とほぼ同時、昭和6年12月現在で求められる。それによると、表3にみるように、新来者とみられる寄留人口が地区の70～80%に達している。しかも、これら新住民の大半が日中は東京方面に通勤・通学する人であるので、地元住民との交流は乏しかったから、地元の人々が用いる通称地名は存在しても、ほとんど知る必要がなかったのである。

以後の人口は、図6のグラフにみるように急増している。すなわち、関東大震災火災前、1920年に約18,000人だった住民が、その災害からほぼ2年後には既に3倍を越える66,000人以上となり、さらに5年を経過した1930年には6倍の約135,000人に達した。この数値は、旧住民約20,000人の自然増では絶対に到達できないもので、当然ながら新来者であり、通称地名をほとんど用いない人々であると断定しても甚しい誤りはないであろう。通称地名は使用者の面から

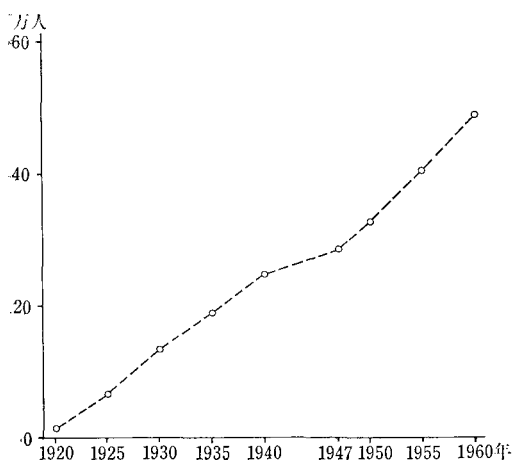


図6 杉並区域の人口増加

も、実態としての地表景観の形態からみても、この時期に急激に消滅せざるを得なかった。つまり、それは地域における外観としても内容としても「変革期」であったことになる。

## VI. 歴史地理学における「変革期」

歴史地理学が取り扱う自然的あるいは人文的な地表形態としての「景観」の変革とは、以上のわずか一例の分析からみても、実際には2つの面をもつと考えられる。

一つは、平穏な時期における住民の生活技術上の変革である。それは経済の充足とともに加速されるが、さきの例でいうなら、燃料や照明器具の導入による山林の使用減少、交通機関における自動車の利用などがこれに相当する。それは都市東京に隣接するための出稼（明治後半から大正年間にかけて、杉並区域の大半は出稼労働が多く、出寄留者が入寄留を上回った）、東京の野菜需要に対する出荷増加などによって、経済的に可能になったものである。

他の一つは、いうまでもなく、いま指摘した新来の移住者の急増であって、両者がこの昭和初年という時期に結合したところに、地表景観の変革が起こったといえてよい。すなわち、まず基礎条件としての在来住民の生活変化があり、そこに新来住民の画期的急増があるという、住民人口の実質的変革がある。この両者を同時に

可能にしたのは、交通・情報の伝達の迅速化といえるであろう。それはこの地域の地形が平坦で障害が少なかったこと（中央本線の直線状なのを見よ）による。

このように地域の構造化が、ある段階に達したとき、一種の起爆薬として、たとえば関東大震災火災が作用するのであって、変革は決して偶然に起こるものではない。このことは第二次世界大戦後40年にして、大都市の地価高騰と高層建築ラッシュが、その相貌を急速に変革しつつあることにもあてはまる。

いわゆる高度成長が交通・通信技術、建築技術とその材料などを着々と変化させつつあった。他方で、社会・経済の組織と機能が生活の核心を大都市に集中させてゆく。こうした諸要素の発達が受容条件となり、そこに投資対象を必要とする法人・個人が新しい思考をもって（新来というより、在来住民の中に経済中心主義の思想をもつ者が、社会活動の中堅人物として成長して来たということであろう。敗戦後に生れた人々が40歳を超えたのである）行動するようになった。すなわち、ここでも居住者の質的变化が認められ、投資対象を土地として、旧住民の立退きを迫るという状況が、爆発的にはじまったとみるべきであろう。つまり、杉並地区における変革期の分析から得られた理論は、別の変革期の場合にあてはめても、ある程度妥当するように思われる。

これまでの歴史地理学の研究では、地域の構造と社会組織についてはかなり詳細な考察がなされて来たと考えられる。ただ、その地域における住民の内容とその変質については、史料の制約もあって、どのように扱うべきかが十分に検討が進められていなかったようである。今後の重要課題の一つといえよう。

また、はじめにふれたように、地域を構成する重要な要素としての人間の行動、思考を左右する心的因子について、われわれはほとんど知るところがない。この分野の研究は今後の学徒が十分に努力を重ねなくてはならないところであろう。

このように述べてきて気がかりになるのは、その研究を進めるべきわが歴史地理学会々員に新しい学徒の入会が乏しいことである。変革がその内部の人間の要素が新しくなることにまつとするならば、既に構造が確立し組織の進んだ学会の変革期は、新会員の増加を契機とするであろう。ところが近年の会員数は、その増加率の停滞に示されるように頭打ちとなっている。この打開策こそ最も緊急の課題でなくてはなるまい。この点を提案して発表を終わるものである。  
(明治大学・非)

〔付記〕

この報告の内容は金沢大会でのシンポジウム内容と大幅に、というより全くといってよいほどに異なっている。理由は浮田氏の報告が欠けて当日は本報告者が独演するはめに陥った結果、思いつくままに支離滅裂に近い内容となったところにある。そこで改めて想を練った結果として、やや整理したのが本稿となった。大会で聴かれた方々にはあらためておわび申し上げる。